論理篇　第二章　悔い改めと世界の変貌

「悔い改め」というものは、ちょっと考えると心だけの問題のようでありますけれども、これは「われの置き換え」――われそのものの内容がクラリと一転してしまうことでありますから、それはただ心だけの問題ではない、世間そのものが一変して別世界になるのであります。自分が変われば世界が変わるということはちょっと考えると「そんなことはあるはずはない」と思われるかもしれませんが、自分が変わればその人の世界が変わる。自分が眼を開けば世界は明るい、自分が眼を閉じれば世界が暗い。これは事実であって、理屈ではない。理屈であればなんとでも駁撃することができるのでありますが、事実であるからなんとも否定のしようがないのであります。

われわれは心がクラリと一転して「偽存在のわれ」を見なくなり、「真実在の神に創造られたままのわれ」を見ることをキリスト教では「悔い改め」と申しますが、仏教では「サトル」と申します。「サトル」には「覚」という字を書く。そして「サトッタ人」を仏といい、覚者という。この「覚」という字は「覚める」という字であります。われわれが夢を見ている、夢の中でわれわれはある環境の中に住んでいる、夢の中ではその環境は実在だと思っている。しかし一たび覚めると環境がクラリと変化してしまう。なんじゃ悲劇の中にいたと思っていたのに蒲団の中かとわかる。しかし夢を見ている人に「それは夢だよ。覚めたら、お前の周囲の事情は、お前が今見ているような不完全な状態ではない」と教えてやっても、覚めるまではわからない。それと同じで、覚れば環境までも変わってくるものだということを、まだ覚らない人に教えてあげてもなかなか解りにくいのであります。

論理篇　第四章　光りは闇と和解せず

「敵を愛せよ」と仰せられたイエスが、なぜ「サタンよ、退け」といわれて、「サタンを愛せよ」といわなかったのでしょうか。「敵」というものも、その実相は完全な人間でありますから、「敵を愛せよ」とは、その実相なる完全な人間を見て愛せよという意味において、正しい真理であります。しかしサタンというものはどうであろうか。それは精神統一修行中に現われた妄想が客観化したものであります。妄想というものは「本来無いもの」をあるかのごとく描いたのが妄想でありますから、その客観化であるサタンというものも、結局は存在するかのごとく見えても本来非実在であります。それで、敵ならその敵の実相を見れば、敵の内性に神の子なる実相を見て愛することができますけれども、異端、妄説、妄念、妄想は「本来無い説」――虚説――でありますから、その実相を見れば、「本来無い」ということがわかるだけでありますから、「本来無いもの」（虚説）に和解することは

絶対にできないのであります。光は暗と和解することはできない。光が近づけば暗は消えるほかはない。それと同じく真説は虚説に近づけば虚説を消す働きになる。真理が妄想の客観化なるサタンに和解せんとして近づけば、かえってサタンを消す働きにならざるをえない、すなわち言葉でこれをいえば「サタンよ、去れ」の一喝とならざるをえないのであります。

虚説を許さないことをもって、和解と寛容の徳がないように思うのはまちがいであります。また虚説を容れることをもって寛容と和解の徳があるように思うのもまちがいであります。虚説を排撃(はいげき)することいよいよ明瞭であればあるほど、真説は明らかに照り、それに照らされて救われる人間もまた多いのであります。

わたしにも最近その例がありました。「生長の家」の某支部をみずから造るべく申し出られまして、聖典『生命の實相』を数十部みずから進んで預かって帰られた方がありました。その某氏は最近、「物質はある」「真我も迷う」の虚説を立てて「生長の家」の真説を迷わす機関雑誌を発行されたのであります。それとともに聖典『生命の實相』を誌友その他に売られたまま、その公金を私用に着服費消しておしまいになったのであります。わたしは「真我は神であるから決して迷わぬ」という正説をもって文章でその虚説を排撃したのでありますが、（すなわち虚説に対してはどこまでも排撃したのでありますが）その人が消費された公金に対しては少しも咎めず、無条件にその金額を進呈して決して請求しませぬという深切な手紙を書いて、その人の実相――決して公金を費消せぬような完全なその人の実相を見ることにしたのであります。これがわたしの範例であります。虚説に対してはあくまでも戦い、人に対してはどこまでも実相を見て許すことにしたのであります。どうかみなさんも虚説(ないもの)に対しては和解することなく、どこまでも「サタンよ去れ」の態度で進んでいただきたく、人間に対しては、その表面の包み（罪）を見ないで、その罪なき完全なる実相を見て、その罪を赦す（その罪を本来無いと見て捨てる）ことにしたいのであります。要は「天地一切のものと和解せよ」との「生長の家」の第一最大の誡命(いましめ)は「天地一切のものの実相と和解せよ」ということであって、仮相や虚説に対しては「サタンよ去れ」と排撃すべきなのであります。釈迦もキリストも同じような態度で虚説を駁撃せられたのであります。

教育篇　「生長の家」の児童教育法

五

精神集中によってわたしは不随意筋を自由にうごかすことができる人を見たことがある。その人は耳に精神を集中して耳を動かそうと思えば耳が動くのである。後頭部に精神を集中して、後頭部の筋肉を動かそうと思えば、首を動かさないでいながら、ポンノクポの所が自由に動くのである。そして、その人はこういっていた。「自分は腸でも胃でも悪くなったときには、胃腸を自由にグルグル動かします。すると胃腸の血のめぐりがよくなって、

お腹をこわしたときでも、すぐなおります」と。

こんなに不随意筋を随意にうごかすことができるほどに達するのはなかなか練習が要るし、その道の天才でないかぎりはできにくいことであろう。しかし身体の一ヵ所（たとえば合掌）に精神を集中することによって血行を思うように支配するようになれるくらいのことは、誰にでもできるのである。これは子供よりも大人に必要なことかもしれない。急な忙しい仕事を一所懸命にやった後やいろいろの世の中の紛糾（いざこざ）で頭に血がのぼせていて、興奮がいつまでも休まらなかったり、急にほかの仕事が手につかなかったりした場合に、逆上した血を思うままに引き下げて、すぐ気分を明るい晴々したものにする力は、この平素の精神集中の修行でやすやすとできるのである。精神集中によって血行を支配するには、「言葉の力」を利用すれば効果が多い。言葉そのものがまた、精神を他の方向に転換して、思うところに集中さす力があるのである。わたしが世俗のことにかかわりすぎて血行の不調を感じている時に実際やってみて効果の多い言葉は次のとおりであるから参考のために書いておく――

「自分はわが肉体の主人公である。主人公だからわが肉体を支配する権能をもっている。自分がわが血液に下れといえば血液はすぐ下らざるをえないのである。さあわが血液よ、下がれ！　ズーッと下がれ。のぼせていた血はズンズンさがって心は落ち着いてきた。」

こういう言葉をしずかに丹田に力を入れて、自分だけに聞こえる底力ある低声（こごえ）で自分の肉体に命令するかのごとく言い聞かすのである。あなたがたも実際この方法をやってみて少しく熟達してこられたならば、どんなにそれがわれわれの生活上必須の武器であるかがわかってこられるであろうと思う。

生命の實相　谷口雅春　日本教分社